

(続 森口鶴松。〈 〉内は筆者補入。句読点筆者)

六ツ むしよにでけまわす と申するわ、此拾柱の神様の内、六柱の神様が、ごしうごう致して被下るごしうごうの理を以て、よを明る時わ、明け六ツとゆう、日中ハ、九ツとゆうので御座ります。今わ時計ができて御座りますで、今わ何時何十分とゆうので御座ります。けれども、昔しからゆゑば、今に於テ」(5ウ) 明け六ツ、暮れ六ツ、日中わ九ツ時とゆうので御座りましよ。又、人間が此世ゑ産れるをりわ、くらい処なり、此よのあかるい処ゑ産れてくるから、赤子とゆう。其赤子の大便小便取るのわ、六ツきとゆう物で取るので御座ります。又、女が子をはらみの時わ、六月目から腹おびとするので御座ります。世界の人間が一日たちたら、一年目には、むじよのかねに近よりたと申す人が御座りましよ」(6オ)

又、人間の病なしの人わ、無病とゆう。内々中よふにくらすのハ、むつまじいとゆうで御座ります。皆人がゆうのわ、此神様の理をゆうているので御座ります。む病になりたとは、此神様が申なさるのにわ、悪しき心をすてゝしまい、誠の心を以て、内々中ようしていたなれば、此体を無病にして、ほどよくごしうごうをしてやると、申なさるので御座ります。此理を以て、六ツ むしよにでけまわす」(6ウ)

と申舛ので御座ります。七ツ なにかに造り取るなら と申するわ、田畑のりゆけが造り取るのでわ御座りません。世界の人間が誠の心になり、内々中能をく、暮して、誠に道を通るよにするのが、造り取りとゆうので御座ります。此理を以て、七ツ なにかに造り取るなら、と申するで御座ります。

八ツ 大和わ豊年や と申するわ、田畑のりゆけいが取るのわ、豊年やと申すので御座りません。是れわ大和とかきて、日本とも」(7オ)

よめる。此日本の人間が、一れつに誠心に成り、内々中能くして、誠の道を通り、わが子にも誠の道を教ゑて、真心に成りていれば、日本一れつに、ふじゆわせんように成るのが、豊年やとゆうので御座ります。此理を以て、八ツ 大和わ豊年や と申すので御座ります。

九ツ こゝ迄についてこい と申するわ、悪しき心をわすれてしまい、善き心になりて、神様の道についてこいと、をしやるので御座ります。此理を以て、九ツ こゝ迄についてこい と申」(7ウ)

ますで御座ります。

十で とりめが定りた と申するわ、田畑りうけい取目がわかるのでわ御座りません。世界の人間が誠の心で、神様の道を付くるなれば、世界の人間わ、みな神様の心に成りたかという処の、人間の心の取目が定りたと、神様が申成るので御座ります。此理を以て、十をと 取目が定りた と申するで御座ります。

天理王の命様と申舛わ、拾社拾柱の神を、そうめうして、天理王の命様と申舛ので御座ります。」(8オ)

- | | |
|----------|---------|
| 第一 国常立の命 | 第二 面足の命 |
| 第三 国狭槌の命 | 第四 月読の命 |
| 第五 雲読の命 | 第六 惶根の命 |

第七 大食天の命

第八 大斗辯の命

第九 伊邪岐の命

第十 伊邪美の命

此十人の神様を拾柱の神とゆうて、此拾柱の神様を総名して、天理王の命とゆうて、勤めをするので御座ります。天わ月日」(8ウ)

両人理わ八柱の神様、玉わ魂、命〈みこと〉はいのち、いのちわからだで御座ります。此理を以て、天理王の命様と申すので御座ります。

貳下り目

とんへ」と正月踊り 初めわやれ面白い と申する正月わ、月の初め、日の初めわ元日、年の初めわ元年で御座ります。其正月にわ、内々中能して誠の心に成りて、忠孝弟の道を通り、我か子も悪しき心に成らず」(9オ)

誠心になりて、我がかきようを勉強して居れば、親が子の心痛わ御座りましよまい。又我身もあくな心もたずして、とん能くごうよくも致さづして、通常の能くして、我家業に勉強し、又、内々中能くして暮して居たなれば、天理に叶た金を被下るので御座ります。此心に成ていれば、種々の興行にも見物いたすようの心で御座ります。さすれば、善き心にいれば、踊を見ているような、面白をかし暮すので御座ります。世界の人間が、皆、此」(9ウ)

心に成れば、面白をかし暮るので御座ります。此善き心が、人間初め、又正月あるで、人間の年も知れる。又、何年という事が知れるので御座り舛。此正月をなさねば、歳も知れず、何月何日の日とゆう事が、知れんので有ましよ。正月が有るで、知れるので御座りましよ。さすれハ、正月わ月の初め、元日わ日の初め、元年わ年の初め。誠心内々中能致して、忠孝弟の道を尽し、とんへ」と、内々中能く、たかいに立やい助けやいの道を通るのわ」(10オ)

人の道で御座ります。人の道なれば、神の道で御座ります。人間わ此道を通るのわ、台で有舛。又神様も初無き人間をこしらゑ被下時に、此心を台にして、人間を拵るゑ被下たので御座りま舛。すれば、人間が台の善き心に成るのが、初めと云う。台の心に成りていれば、とんと申よ暮さる。又、物を見るような心に成りて、面白をかし暮るので御座ります。此理を以て、とんへ」と正月踊り 初めわやれ面白い と申舛ので御座ります。」(10ウ)

二ツ ふしきなふしん掛れば やれにぎわしや と申するわ、家を立るふしんでわ御座りません。是れは人間のからだを、はそんなふしんで御座ります。はそんなと申するわ、我心を使ゑ、病気を拵るゑ、難ぎをしているのを、なをすのが、はそんなと申すので御座ります。痛ミ、なやみ貫て、難ぎしている人を見て、あの人わかわいそな人やな、とゆうて、此神様の法噺を聞かして貫て、心を入替ゑした上なれば、あの病気をなをる」(11オ)

やろ。あの人わかわいそな人故、私よりによいを掛け、此神様の噺を聞きてやようにゆい、聞く心に成りてなれば、我から頼ミてやるようにするのが、ゆわいの道で御座ります。此理を以て、二ツ ふしきなふしんかゝれば やれにぎわしや と申で

御座ります。三ツ 身に付 と申するわ、前の二ツの歌の通りで御座りまして、人にさとし致して貫て理口物を貫ますれば、身に付ので御座りましよ。又身が我難ぎして」(11ウ)

居るのを、人より難ぎするのを、かわいそうな物やと思ふて、神様の御嘯を聞かして貫て、人より我身にとくを付て貫ふので御座ります。徳を付て貫ふと申するハ、身に付て貫ふ事を申ますので御座ります。人より徳を付て貫ひ、人が難ぎする人をおかわいと思ふて、我から人に身に付るようにするのが、人の道で御座ります。人に身を付て貫ひ、人に身を付て、カやししたりするのが、神の道で御座ります。此通りにして、たがいに身の付やいを」(12オ)

致していたなれば、世界の人間わ皆、誠の心に成りて、難ぎする人わ助けてやり、ふじうする人にわほどこしてやり、たがいにたてやい助けやいの道を通る様に成るので御座ります。此理を以て、三ツ 身に付 と申ますので御座ります。四ツ 世なをり と申するわ、悪しき心を持たずして、三ツ目の通りに、人より身を付て貫ふば、又人に身を付け、かやしを致し、たがいに善き事を教ふやいをして、世界の人間が皆同じ」(12ウ) 心に成、たがいにたてやい助けやいの道を通りていたなれば、此世わ善き世界に成るので御座ります。此理を以て、四ツ 世なをり と申ますので御座ります。

五ツ いつれもつきくるなれば と申するわ、前の四ツ目の歌の通りに、誠の心になりて、善き事わ、たがいに教ふやい、たがいに助けやいの道を通り、人がどのような事を言をと、心をおかわさずして、神の道を付てくるなれば、立木のかれる如くにして」(13オ)

やる程に。此世でうごける間わ、神より人間のからだを貸してやる程に。悪しき心になるから、神より前目に受取のやほとに。善き心に成りて、神の道を守りていれば、立木のかれる如くにごかれんように成たら、神が受取る程にと、此神様が申なさるので御座ります。そこで世界の人間に善き心になりて、神の道を付てこい、と申なさるので御座ります。此理を以て、五ツ

いつれも付くるならば と申ますので御座ります」(13ウ)

六ツ むほんの根を切ろ と申するわ、誠の心に成りて、我がぎようを大切に、いつ迄でもかきようを勉強して、あたりまへの能〈よ〉をして、内々中能暮せば、暮す道りに守りてやろう。又悪しき心を以て、とん能く、ごう能く、とんなむほんをし、人の物を我身に付たいと言ふ心に成り、内々わ中よ暮さずして居たなれば、暮す通りのしこうしてやる程に、と申なさるので御座ります。善き心に成て居れば、天より」(14オ) 幸福を被下て、どこ不自由なきように、致して被下ので御座ります。悪な心に成りて居れば、天より病と言ふなやみをやりて、いつでも難ぎする様なしてやる程に、と世界の人間の心通りに、神がしごうをしてやる程に、と申被成るので御座ります。善きごしごうを致して貫ひ度ば、悪しきむほん心の根を切れ、根切りたなれば、神もむほんな〈き〉ように、しごうする。根を切る程にと、神様が申被成るので御座ります。」(14ウ)

此理を以て、六ツ むほんの根を切ろう と申被成ので御座ります。

七ツ なんしうをすくいあくれば と申するわ、前の六ツ目の歌の通りで御座りまして、悪しきむほん心を捨てしまし、誠心になりて、あたりまいの能〈欲〉を放し、内々わ中能くし、我がかきよを大切に、たかいにたてやい助けやいの道を守れば、難きわさん程に。此神よりあわれみを掛けて、どこ不自由無きように、守りてやると、神様が申被成ので御座ります。」(15オ)

此理を以て、七ツ なんじゆうをすくいあぐれば と申ますので御座ります。

八ツ 病の根を切ろう と申するわ、悪しき心を持て、病の根を切れんのやでと、申被成る。善き心になりて、内々わ、あなたいりやこそと申して、内々わ中能暮し、又人と仕事致とも、をれがいりやこそと、じまん心を出ずして、あなたいりやこそと、ほめる心を出して、日々にこそへをして、月日を送りいる物わ、病の根を切りてやる程にと、いつでも神がどこふじゆなしに」(15ウ)

自由自在に、神様が御しゆうごう致してやると、申被成るので御座ります。此理を以、八ツ 病の根を切ふ と申ますので御座ります。

九ツ 心を定めいよなら と申するわ、世界の人間が悪しき心を捨て、誠の心と入し替へて、世界の人間わ、同じ誠心と定めたなれば、神様も世界の人間の心通りに心を定めて、世界の人間のごしこうする程に、神様が被成るので御座ります。此理を次、九ツ 心を定めいよなら と申ますので御座り舛」(16オ) 十で 処のをさまりや と申するのわ、世界の人間が、皆善き心に成りたなれば、神様の心がをちつくと、申被成ので御座り舛。悪しき心に成りて居れば、世界を泥海にもしてしまをと、思ふけれど、今拵らへた無世界わ、神様が処で有ると申被成ので御座ります。人間も世界わ処、神様も世界も処、此処の人間の心を定りたなれば、神様の心を納まると、申なさるので御座ります。此理を以て、十で処の納まりや」(16ウ)

と申ので御座り舛。

天理王ノ命ト申舛ハ、前ノ通りテ御座り舛テ、拾社拾柱ノ神ヲ総名ニテ天理王ノ命ト申ノテ御座り舛。細かき理ト、前ノ壺下リ目ニ出テ御座り舛。

三下り目

一ツ 日本庄屋敷の勤めの場所わ世の本や と申舛ハ、日の本わ日本で御座り舛。日本国の奈良県大和国山辺郡庄屋敷村と申舛処に本部教会所に成りて有」(17オ)

処へ無世界、無人間御拵へ被下る時、此地場へ御下り被下たので御座ります。それで、日本わ日乃本、此地場も日の元で御座ります。此日の元庄屋敷の本部教会、御勤め被成るのわ、楽ら〈神楽〉やそれへこの面をかざうて、御勤め被成るのわ、此十柱の神様の御姿で御ざります。此勤めの理、十二下の理をくわしく嘯し聞きた事なれば、世界に人間が皆、善き教で有ると言ふて、心を寄せて、日の元庄屋敷の、元の親神様が祭りて有ると言ふて」(17ウ)

誠心に成りて、あなたも私もと言ふて、皆親神様を思ひ出して来るので御座ります。